

◎ 小学校を巡回しています。姿勢保持、鉛筆の持ち方や操作 etc

そのことへの具体的な支援や、それらが育つ具体的な支援方法を教えて頂きたい。（学校で行えること）

（教育センター）

→効果的に伸ばすには、それらがうまく行かない原因を評価し、原因に対して手入れをすることです。

学習効果を高める一番のポイントは ACTIVE スイッチをどう押せばいいかと適切な段階付けです。

Youtube 知的障害・発達障害の理解と支援⑨「発達障害と作業療法」

https://www.youtube.com/watch?v=138wsBITK_U

◎愛着障がいの疑いがある子に対しての接し方について。

（保育園）

→愛着「障がい」と考えるよりは、『先生や園児とこれから愛着を豊かに育くむ試行錯誤の物語をどのように描くか』という発想からスタートするのはいかがでしょうか？

→ラポール形成の方法は、心理学的、行動療法的、感覚運動的、多種多様のアプローチ方法があります。

◎IQは高いが、集団生活（活動）に入りにくい子への対応。

（保育園）

→IQが高いからこそ、難しくなる集団適応とは何でしょうか？

不器用さが原因なのか？感覚被爆が原因なのか？マインドリーディングが苦手なのか？

そして、出来ないことを出来るようにはなかなか出来ないものです。

しかし、芽生えていることを拡大していくことは容易なことが多いです。

IQの高い彼が、集団に適応している場面はどんな時、そこからどのような発展が可能でしょうか？

◎他者の言動に過敏に反応し、自分と関わりのない事項にイライラし、他者を継続的に責め続ける等の言動を起こす子に対しての支援方法。

（療育）

→『ボクは、人よりも繊細で感じやすいんだ。みんながワーツと騒いでいるのは苦手・・・友達が何か言ってくるのも・・・ドキドキバクバクしちゃうんだ。ほんとうはおだやかに暮らしたいと思ってるのに。周りの人にはあまり気付いてもらえない。自分でもうまく言えないんだ。』もしかして、こんな心の声を持っているかもしれません。そんな個性を持ったストレスの多い人生を歩むであろうこどもに対して、リラックスする方法を一緒に練習したり、刺激の多い自由場面では落ち着ける場所を確保したり、みんなで一緒に深呼吸したり黙想したり、心を落ち着ける練習をしたりして、セルフマネジメント能力を今磨けば、過敏さが残っていたとしても、将来きっと世渡り上手になるはず！！こんな発想はいかがでしょう？

◎フラッシュバックを起こす、記憶がとても曖昧で、自分の都合の良い内容に記憶をすり替えて他者を責めるため、他者とのトラブルが絶えない子に対しての支援の仕方。

（療育）

→レジリエンス（しなやかさ）の視点から見れば、記憶を都合よくすり替えるというのは生きていくための力強さと捉えることが出来るかもしれません。他者とのトラブルなんて起こしている暇がないほど、

彼が今他者と楽しめることは何かありますでしょうか？楽しい中で、「もっと優しくてー！いやーん、優しくされると嬉しくてとろけちゃう」といった、そのような感謝を返されるような役割を経験する強力な場面は作れないでしょうか？

◎なわとびが上手く跳べない子に対しての支援の仕方。

(療育)

→縄跳びはなぜ難しいのでしょうか？

例グニョグニョの紐、その場で跳ね続ける身体のパネ、そして紐の動きと身体の動きを合わせるダブルタスク

分解しましょう！！

- ① グニョグニョしないフラフープを使って、後ろから前に回して、回した後に歩いてくぐる
- ② それをだんだんはやくして、早歩きから小走り程度まで出来るようになる
- ③ 今度はトランポリンの上で跳ねながら、フラフープを前にしてその場でぴよんとまたぐ
- ④ だんだんはやくする
- ⑤ トランポリンの上でその場で跳ねながらフラフープ縄跳びが出来る
- ⑥ 次に①→⑤を太めで重さがあるロープ縄跳びで出来るようにする
- ⑦ 次に①→⑤を細い縄跳びで出来るようにする

※難しい活動はその複雑さを分解して、シンプルに。せこい技でいいので必ず出来るレベル(スモールステップ)まで小分けしましょう。

◎小学校高学年の子どもに対する感覚統合の継続的な支援に、どんなことがありますか？

(小学校)

◎普通学校の教室内でできる感覚統合はどんなものがありますか？

(小学校)

→感覚統合的な支援よりも、感覚統合的なこどもの理解が必要です。

こどもの困り感を理解すると、あら不思議！！支援は今まで通りでも、必ずこどもがいい方向へと劇的に改善します。同じ指導でも、こどもを理解した上で行っているのとそうでないのとでは雲泥の差ですね。感覚統合 Q&A という本がおすすめです。

もしくは京都府作業療法士会の HP からダウンロードできる冊子もおすすめです。

http://www.h3.dion.ne.jp/~kot/for_members/kakubu_iinkai/tokubetu_shien.html

◎小学校支援学級の教師をしています。子どもたちは、2次障がいをかかえ、やはり学習意欲が低く、自分に自信がないことを隠そうと暴言をはいたり、無気力になっています。何かいい支援方法がありますか？

(小学校)

→マズローの欲求階層モデルをご存知でしょうか？「生理的欲求」→「安全欲求」→「社会的欲求」→「尊厳欲求」→「自己実現欲求」という流れがあります。いわゆる「衣食足りて礼節を知る」という内容です。性善説に立って、どんなこどもにもとても大きな意欲が眠っているが発揮できないでいるという哲学に立脚し、低次から高次までのそれぞれのレベルでの欲求をクラスの中で意図的に提供できるようにデザインされてみてはいかがでしょうか？その結果、効いたか効いてないかを検証しながら進めていくと逆に2次障がいのこどもたちへのアプローチを考えていく作業そのものが芸術的で楽しくなってくると思います。こどもの雰囲気よりもまず、アプローチの雰囲気から心地よく、安全

で、そして、役割が持てて、かつそれが自尊心を養い、眠っている意欲を刺激して、二次障がいがあるともなりたい自分になるという基本的な人間のあり方を模索する喜びに出会えるといいですね。

◎筋肉の弱さを言われている子がいて、まだ自分の要求の時以外は人と関わりを持とうとしないので、感覚統合の本などに載っているような、見本を見て行うようなことができないので、トランポリン以外で何か、発達年齢の低い子たちができるような遊び、おすすめの体操があれば教えてください。(マット、巧技台、ウレタンブロック、フラフープ等はありません)

(療育)

→感覚統合遊具よりも最も治療高価の高いアイテムがあります。それは人の身体です。グルリンパー、プロレスごっこ、ヘッドロックに縄抜け、人間滑り台に人間トンネル、お馬さん、肩車、とにかくペロペロマッサージ。理屈なんて忘れて、身体と身体でもみくちやになってください。感覚統合の熟達した治療者ほど、何も無い部屋でこどもと楽しく遊べ、こどもの触覚、筋肉感覚、バランス感覚をどんどん発達させます。習うより慣れろです。まだまだ人間ではなく、動物としての脳みそを鍛える時代ですから、まずは大人から動物的になって、我を忘れてこどもと戯れてみてください。

◎感覚統合についての基本的な内容について知りたいです。

(中学校)

◎授業や体育の中で、みんなと一緒に簡単にできる方法があれば紹介していただきたい。

(小学校)

→スイッチポンではなくて、手間暇かけてアナログにやるのが感覚統合です。スマホでコミュニケーションを取るのではなく、和紙をすいて、墨をすって、筆をとって書いて、そしてポストへ投函するのが感覚統合です。豊かな感覚入力には豊かな脳の感受性を育み、豊かな表現力に繋がるのが感覚統合です。なるべく、不便に手間暇かけて原始的にやることで、身体全身の感覚情報を増やすことが感覚統合理論です。

◎感覚統合について可児市近辺で相談できる病院等を教えてください。

(中学校)

→ごめんなさい！！矢島さんお願いします。 拝

◎子どものどんなところを、どう見たら良いのか、見立てる視点を教えてください。

(小学校)

→こどもの見方が変化してきています。階層論からシステム論へ。障がいに焦点を当てるだけでは、支援者とこどもが共に不幸になります。つまり私たちの、捉え方や見かたのバリエーションが増えるほどに、こどもと家族を幸せにする方法がいくつも見えてくるのです。ICF 意思と能力を分けてみる人間作業モデルなど、、、

◎公園外出をし、砂場に行くとサンダルの中に砂や小石が極少量入る事があり、サンダルの中に入る感覚を嫌い、前に進めず、動けなかったり、サンダルの中に異物がある感覚が気になり、立ち止まり歩けないことがあります。どのように和らげていってあげたら良いか、ご教授下さると助かります。

(放課後等デイサービス)

→『対処方法(ハウツー)を知ることよりも、発想を転換して自ら考えるトレーニングが支援力を磨きます』感覚に慣れるということはどういうことでしょうか？普段から、こどもがどのように発達し世界を広げていくのだろうかという視点で見つめていきましょう。興味を持ったものを触れたり、つついたり、舐めたりつ

かんだり、自ら探索していく中で広がっていきます。食べ物もそうですね。甘いもの辛いもの苦いもの酸っぱいもの、そして大人になるとミョウガや塩辛、そして滋味と言われるような渋い食べ物の美味しさと出会い、食の世界が広がっていきます。砂や小石といった素材が持つ感覚との楽しい出会いを探していきませんか？「一緒に歩いてくれない」や「動けない」という問題と、触覚的な楽しさや足の裏でいろんな感覚を感じる喜びのバリエーションが少ないという問題は分けて考えてみてはいかがでしょうか？石ころや砂をスコップで間接的に掘って、雨樋を滑り落としていく視覚的な変化を楽しむ。素足で砂の山を蹴って崩すことに興奮する。また、いろんな感覚が混じると言う経験を楽しむことも必要でしょう。服が少し濡れただけでも着替えたいくなる子どもがいますね。

肌が濡れるのではなく、服と肌と濡れるという感覚モダリティ。サンダルの感覚と砂や石が混じるという感覚のモダリティ。足からこだわる必要もないでしょう。他の部位でも構いません。どんなモダリティをどんな遊びの設定なら、このお子さんと一緒にはじめられて広がっていただけるのでしょうか？試行錯誤を始め、子どもと一緒にトライアンドエラーを楽しんでみませんか？

◎自閉症の利用者がご飯を食べる際に、食べることを嫌がります。無理矢理食べさせるべきか、それともあげることを辞めるべきか？

(児童発達支援・放課後等デイサービス)

→『対処方法(ハウツー)を知ることよりも、発想を転換して自ら考えるトレーニングが支援力を磨きます』さて、食べることを嫌がっているというのはこちらの認知ですね。タイの北部の山岳民族の集落に行きますと、タガメの内臓が超高級料理でみんなが競って食べますが、すすめられたあなたは食べますか？まずは、彼が食べ物を、もしくは食べるという行為をどのように認知しているのでしょうか？同じ自閉症と言えども、一人一人、認知の仕方が違います。私の知っているある自閉症の男の子は豚汁のようなお味噌汁や煮物が食べられませんでした。彼は混じることが大っ嫌いでした。レゴのボックスにいろんな色が混じっていると色を分けたくくなります。なるほど、味や見た目が混じり複合した感覚が苦手なのだと思います、豚汁も煮物も全部分別しました。人参、玉ねぎ、ネギ、スープ、豚肉といったようにお皿に分けていったところ、よろこんであつという間に完食しおかわりの要求をしてくれました。安心して食べるようになったメニューは、今度は逆に2種類混じらせ、3種類混じらせと増やしていくと豚汁も煮物も一皿で食べてくれるようになりました。今でも初めてのメニューは苦手ですが、でも分解してからまた食べられるようになることを知った彼は、以前よりもリラックスして食事が食べられるようになりました。この方法は彼には効きましたが、他の自閉症児には効かないかもしれません。

性善説に立つならば、本当はこの自閉症の利用者はみんなと一緒に食べたい。でも、何か理由があって、食べられないでいるというスタンスに立ってみます。すると、彼はいつ誰とどこでどんなものなら食べられて、いつ誰とどこでどんなものなら食べられなくて、という情報収集と場面観察と情報の分類と整理をする必要がでてきます。彼は何が認知できていて、何が認知できなくて、そして、何が今芽生えそうで、どんな条件と設定であれば、広がっていきそうなののでしょうか？ぜひ、分析を進めてみてください。

◎人の声(甲高い)などに敏感に反応し、自分をコントロールできず、物に当たってしまう場合の対処の仕方。

(放課後等デイサービス)

→『対処方法(ハウツー)を知ることよりも、発想を転換して自ら考えるトレーニングが支援力を磨きます』殺されてしまうかもしれないというような場面で皆さんは自分をコントロールできるのでしょうか？私たちにとっては、少し不快だと思えるような甲高い声も、ある人にとっては身の危険を感じるような刺激となっている場合があります。感じ方にも個性があるのです。また、過敏=問題とは言えるのでしょうか？情緒が不安定とも言えますが、怒ったり悲しんだり笑ったりと情緒が豊かという捉え方も可能です。調律師や音楽家に聴覚

過敏な人が多く、またジミー大西さんのように芸術家の多くは視覚過敏な人が多いのです。聴覚過敏の少年が、苦手な音との付き合い方を学べば、将来のそれがとっても役に立つと思いませんか。人には好き嫌いが必ずあります。激しい人も激しくない人もいます。そして、それぞれフェチや嗜好性があります。彼はどんな感覚が好きでしょうか。熱狂的に没頭できる感覚はありますか？ある重度の自閉症のお子さんは、掃除機が大嫌いで遠くでも掃除機の音が少しでもするとわざわざその音を探して、泣いて怒って暴れていました。その反面、彼女は揺れ刺激が何より大好物で、シーツブランコは1時間でも2時間でも激しく楽しむ事ができました。私がシーツブランコで彼女をとことん喜ばせ、絶頂の時に掃除機をかけてみました。全く問題ありません。掃除機をかけたら揺れが始まるという条件を何度も繰り返しました。しばらくすると、掃除機の音を聞いただけでケラケラ笑うようになりました。これはこのケースだからあてはまった方法です。

嫌な刺激がいつ起こるか分からないというのは、感覚過敏のある人にとっては地獄です。あるお子さんは、運動会のピストルがダメでした。作業療法で彼の前で風船を膨らませたら、いつ割れるかわからないと言い、顔面蒼白になりました。僕が、布団の下に風船を入れて、それをジャンプして割って見せました。彼に「割ってみる？」と聞くと「割る」と言いい何回も割りました。予測できる刺激ならなんとか克服できるようでしたね。さらに、小学校から火薬のピストルを借りてきて、イヤマフをして、彼にピストルを鳴らすように言うと、彼はピストルを鳴らす事ができました。自分からピストルの音を経験した彼は、運動会のピストルも好きではないが、やり過ごせるようになりました。経験は人を変えます。

甲高い声のお友達と、彼の好きな遊びが共有できるようなそんなセッティングはないのでしょうか？答えは、支援者と過敏な彼との試行錯誤の中にあるはずです。

◎感覚過敏がある子で、プールやボールプールに入りたがらない子がいますが、偏食もあるようで、野菜を全然食べない、ゼリーやグミはセンターで食べるが、家では食べないなどがある様子です。どうしたらこういう子の偏食は良くなるのでしょうか？

(発達支援センター)

→『対処方法（ハウツー）を知ることよりも、発想を転換して自ら考えるトレーニングが支援力を磨きます』
「偏食」、「他害」、「こだわり」、「切り替えの悪さ」。ネガティブワードがたくさん出てきます。療育はアートです。発想の転換と美しい解放が私たち支援を生業とする者に求められるのです。

「偏食」→味の楽しみがこれから開発される過程にある。だからこそ、ゼリーやグミはこれから時を経て家で食べられるようになる。

「他害」→表現方法を知らないに、なんとしてでも関わりたいモチベーションがあるから、お友達を強引に操作してしまう。この子は、対人に対する意欲が高いから、これから「社会性」は大器晩成する。

「こだわり」→彼は職人肌で頑固で将来粘り強い男になるから、今いろんなことにこだわって、将来の準備をしている。とことんこだわらせてあげて、満足させた上で、こだわらない部分もしっかり作っていこう。

「ボールプールに入りたがらない」→石橋を叩く慎重肌だから、入りたがらないのではなく、しっかりと分かった上で少しずつ入りたいと、、、そのようなタイプかもしれません。

この情報だけではわかりませんが、捉え方にこだわってください。捉え方を深めてください。何をやるかをどれだけ調べても、なかなかヒットしません。捉え方が正しければ、選んだ支援方法は外さない、もしくは打率が上がります。

◎肢体不自由児で下半身の動きをどう引き出していくのか知りたい。身体のポジショニングのポイントが知りたい。

(発達支援センター)

→『対処方法（ハウツー）を知ることよりも、発想を転換して自ら考えるトレーニングが支援力を磨きます』
肢体不自由もそのタイプやパターンで様々です。また、こどもの興味価値関心や意思の発達水準によって全く異なります。そして方法論ではなく、評価に基づく方法をオーダーメイドしなければなりません。僕がいつもやっている肢体不自由児の評価方法は、対象となるお子さんの姿勢や動き、話し方が完全に真似できるようにすることです。ビデオで録画して、何度も何度も真似します。完全なコピーができるとあら不思議、彼の住んでいる世界が自分の身体を通してリアルに見えてきます。そうすると自然に、どこをどうポジショニングすると楽だとか、どこをどう動かしてあげると足の動きを引き出しやすいとかということが自然に見えてきます。彼の身体が自分の身体として理解できるようにすることをまず練習してみてください。アイデアはいくらでも湧いてきます。

◎体の軸ができていなくて、すぐ姿勢が崩れてしまう子はどのような活動（遊び）をすると良いのか知りたい。
(発達支援センター)

→『対処方法（ハウツー）を知ることよりも、発想を転換して自ら考えるトレーニングが支援力を磨きます』
体の軸とは、どのようにして出来てくるのでしょうか？こどもたちはどのような遊びや生活習慣を通して軸を育てているのでしょうか。コンビニでうんこ座りしている若者たちや電車の床にしゃがみこんでいる大人。私たちもしかり。一昔前の日本人と比較するとこどもの姿勢を批判的に見ている私たち自身もけっして誇れたようなものではございません。なぜ私たちの軸は崩壊してきているのでしょうか？姿勢はその時々々の社会情勢や文化を反映します。椅子に座って、机で教科書を開き、テレビを見て、ゲームをして、車にのって、そしてアスファルトの上を歩く。現在の私たちは二次元の環境ばかりで楽しんでいるだけになってしまっています。ちゃぶ台で正座して、お互いの顔を見たりおひつを見たり、薪を割ってしゃがんで風呂を炊き、虫をおいかけ、そっと木の裏に手を伸ばし、バスに乗ってお金を払って、田んぼの畔をのぼったり降りたり。このような三次元の環境で空間を広く使いながら複雑に生きていくと重力と身体の関係の中で効率的に動くために軸が備わってくるのです。飛んだりしゃがんだり跳ねたりバランスをとったり、もぐったり穴を掘ったり。このようなことがイベント的ではなく、毎日の繰り返しのうちに組み込まれたら、必ずこども達の軸は強固になります。例えば保育園でお歌を歌う時に毎日乾布摩擦をしたり、夏はクラシックな二本下駄で過ごしたり。その環境、その生活圏、その文化の中でどんな工夫が考えられますでしょうか？

◎活動の中で、行動が慌ただしく動いてしまう子がいます。座って待つことより、その場で立って待つことが苦手です。「ゆっくり」で1つのことに落ち着いて活動に取り組めるようにしたいのですが、体幹をつくるような活動が知りたいです。

(療育)

→『対処方法（ハウツー）を知ることよりも、発想を転換して自ら考えるトレーニングが支援力を磨きます』
方法よりも原因の究明がまず先ですね。慌ただしく動いてしまう原因が、体幹機能の低下であれば、体幹のトレーニングが有効かもしれません。ただし、姿勢保持の問題＝体幹機能の低下という盲目的な信仰が蔓延しているようにも見えます。(確かに多いですが) 感覚欲求の強さにより副交感神経が優位になり落ち着けないのであれば、腹式呼吸の促通やリラックスする練習が必要かもしれません。体幹機能が低下しすぎている場合は、体幹筋群を使わなくても姿勢保持できるような椅子の工夫が必要かもしれません。不注意の問題かもしれませんし、感覚の過敏性の問題かもしれません。概念形成の未熟さや認知の偏りによる問題かもしれませんね。症状に対する対処ではなく、原因に対する手入れが成否のカギをにぎっています。

こちらの情報ですと、

- ① 座っては待てるけれども、立って待つことが苦手
- ② ゆっくりという口頭指示の手がかりでは、スローモーション運動への変換が難しい

ということですね。

①ブレーキの筋群よりもアクセルの筋群が優位ということかもしれません。(仮説)アクセルは体の後ろ側の筋群、つまり飛行機などの伸展姿勢の筋肉群です。ブレーキは、身体の前面筋群つまりダンゴムシのポーズなどの屈曲姿勢です。待つという大人の要求よりも前に、例えば「豚の丸焼きつかまり」を30秒できれば、豚さん止まれという指示で30秒止まることができるかもしれません。

②ゆっくり空間を動くには動きを感じる力が育っていなければなりません。その前に、手足が空間ではなく固定され強調されているようなジャングルジムの上をゆっくり動いたりできて、また立位ブランコのような動きのある中で身体を協調的に止める中で待てたりと、そのようなことがたくさんできて、何も手がかりがない中で「ゆっくり」+「何かをやる」というWタスクを手取り足取りではなく、口頭指示だけで出来るようになるのではないのでしょうか？いずれにせよ、少ない情報の中での仮説に基づく方法です。

そして、最後に体幹についてですが、体幹は座位や、立位の中で育ちません。手のハイハイから両生類のハイハイ、そして四つ這いから高這い、そして中腰のようなお猿さんの姿勢といったように、動物から人へ進化する過程の中間姿勢の中で近位関節やヘッドを強固に保持する能力が強化され、体幹が育つのです。昔子どもたちが丸太の上で中腰でバランスをとりながら、セミを捕まえようとそーそーと手を伸ばす、そんな原始的な行動の中で自然と育つのです。そのようなそーと遊ぶことができるからこそ、大人が「ゆっくりやりなさい」という指示に従えるようになるのです。さて、どんな活動なら、対象のお子さんのやる気スイッチがはいるのでしょうか？

◎物を片づける際に手に持ってもすぐに投げてしまいます。そういった行動の改善の仕方。

(児童発達支援・放課後等デイサービス)

→『対処方法(ハウツー)を知ることよりも、発想を転換して自ら考えるトレーニングが支援力を磨きます』
「片付ける時に手に持ってもすぐに投げてしまう」という情報を、「投げてしまう」と捉えるのか、「投げることができるんだ!!!」と捉えるかで、道が分かれるような気がします。こどもは遊びます。遊んで育ちます。食べるのも、逃げるのも、大人の言うことを聞くのも、こどもにとったら全て遊びであり芽生えです。7歳までは神の内というやつですね。持つ→投げる→療育者が片付けボックスでキャッチする→みんなが褒めて大喜びするというループにこどもがはまれば、しめしめ、大人に主導権が移ります。片付ける時間でなくても片付けたなったらこちらのペースです。今度は、重い物をうんとこしょと投げて片付ける。それができたら、ちらかった輪っかを棒にひっかけて片付ける。そんなこんなをしている際に、こどもは夢中で遊びますから物を把持し続ける力が育ちます。このような方法は、どんな教科書を読んでも書いていません。投げるができるんだ!!!という、大人の遊び心を持った発想が、そのようなアイデアにつながります。こどもと対峙する時に、「遊び心でこどもに負けたくない!」という実践哲学が必要なのだと私は考えます。

◎人と関わりを持ちたくて、話せないから手で相手を叩いて関わりを持とうとしてしまう。このような場合の対応の仕方を教えて頂きたいです。

(児童発達支援・放課後等デイサービス)

→『対処方法(ハウツー)を知ることよりも、発想を転換して自ら考えるトレーニングが支援力を磨きます』
「人と関わりを持ちたくて、話せないから相手を叩く」というような情報を聞くと、僕はとっても嬉しくなります。なぜなら、人とうまく関われないという能力の未熟さがあるにも関わらず、人と関わりを持ちたいという気持ちが能力を超えて発達しているからです。後は、能力さえ育てばいいし、能力が伸びていく時の「やってやったぜ感」を彼と共有できるからです。とりあえずは、人と関わる喜びで満たされることが目的で、人どう関わるかは手段ですので、そんなに前のめりにならなくてもいいように、とにかく彼にセクハラします。

横を通るたびに徹底的にべたついてみます。彼の期待を超えるような量でねっとり。全身触りまくったり、ハグしたり、ベタベタ触覚刺激に彼が叩くという筋肉の感覚ではなく、ベタベタという触覚で返してきてくれたさらに喜んでベタベタします。触覚的なやりとりとその成功を学んだら、お友達もまぜて三人でベタベタし合うのも楽しいかもしれません。

◎好きな動きを繰り返し続け、他の事を受け入れにくい子の場合。

(放課後等デイサービス)

→『対処方法（ハウツー）を知ることよりも、発想を転換して自ら考えるトレーニングが支援力を磨きます』
固定概念を持たずに、こどもたちのあるがままを注意深く注意深く観察してみてください。ファールやシャーロックホームズになったつもりで、あるがままを細かく観ていきましょう。

あるお子さんは他の事を受け入れる余裕を作り出すために一生懸命身体が足りない刺激を繰り返していたりしますが、定型発達の水準で比較されてしまうために、そんな努力をしても「他の事を受け入れにくい」とレッテルを貼られてしまい、そうやって追い詰められるほどに好きな動きを繰り返してしまったり、、、、感情の処理に時間がかかるため、ある一定時間跳ね続けることで、時間を短縮して切り替えられるように本人なりに準備を進めているにもかかわらず、私たちの文化からすると、その跳ねている時間があまりにも長いから待てずに、「他の事を受け入れ難い」と判断されてしまったり、、、、

例えば、前庭動眼神経の統合が未熟で、眼球の固定力が弱いために、状況が見えにくく、ぐるぐる回り続けて目まい反応を起こす事で前庭動眼神経系の成熟を進めていて、しっかりとそこが育てば注意を維持したり、空間を認知できるようになるため、他の事が受け入れられるレベルに到達するのだけれども、その下のレベルをがんばっているから大人や友達から認めてもらえない、、などなど、様々な背景があるでしょう。

不器用なこども達の精一杯が見えてくれば、どのような支援、声かけ、段階付けが必要か、またそこにたどり着くためにはどのようなプログラムを今こどもと一緒に楽しんで、一緒に挑戦していけばいいかが見えてきます。いかがでしょうか？つまり、観察力を磨き、観察し分析し深めていく楽しさに支援者が出会うということが、対処方法を見つける近道になると思います。

◎自分が勉強をしなければならない（したい）気持ちとは逆に集中力に欠ける。集中力を持続できるような（させる）対応方法や関わり方。

(放課後等デイサービス)

→『対処方法（ハウツー）を知ることよりも、発想を転換して自ら考えるトレーニングが支援力を磨きます』
「自分が勉強をしなければならない（したい）気持ちとは逆に集中力に欠ける」という状況にあなたが陥った時、あなたならどんなことをしていますでしょうか？僕は、仕事や勉強などの義務作業が大っ嫌いです。だからサラリーマンを辞めて、作業療法士となり、1年中遊んでいます。でも、期待され、おだてられちゃうと木に登る豚さんのような性格ですから、このように講師依頼を受けて、皆様の前でお話する役割を頂くと、不注意な僕ではございますが、華々しいプレゼンをするというターゲットに焦点を当て、狩人的に今度は異常な集中力を発揮する事になるのです。というように、こどもひとりひとりの注意が難しい原因は、身体の問題であったり、個性の問題であったり、経験や役割の問題であったり、興味価値関心の問題であったり、そして、その逆もまた然り。どこから攻めれば、こどもが集中力を発揮できるかは、個性を生かして様々だと思います。一斉指導が必要な普通学級ではなく、個々に応じてあれやこれやとヒットする方法を探していき、大きな結果が得られるのが、療育という仕事の醍醐味です。さて、彼は、どんな身体の問題があり、どんな個性で、どんな興味価値関心を持ち、どんな行動のパターンや特性を持ち、どんな役割ならより力を発揮し、どんな経験をこれまでして、どんな条件なら集中力をより発揮できているのでしょうか？さ——、どんどん情報収集して

いきましょう！！！！知れば知れば知るほどアイデアがどんどん湧いてくることでしょう。

◎未満児さんは始まる前に、リズム体操をしています。体操が始まると母親に抱っこされてやりたがりません。どうやったらやるようになりますか？

(発達支援センター)

→『対処方法（ハウツー）を知ることよりも、発想を転換して自ら考えるトレーニングが支援力を磨きます』

あなたはリズム体操を通して、お子さんの何を育てたいのでしょうか？リズム体操を育てたいのでしょうか？それとも母子分離を促したいのでしょうか？リズム体操が目的ですか？それとも手段でしょうか？リズム体操が目的なら、リズム体操の中の何を届けたいのでしょうか？リズムですか？音楽ですか？体操ですか？アイコンタクトですか？それとも母子関係ですか？

さらに、お子さんはリズム体操に参加しない理由や背景はどこにあるのでしょうか？未満児という低年齢において、集団参加に慎重になるという行動は、本当に問題行動でしょうか？（問題である場合もあるでしょう）慎重であるということは、自分を守る事が上手という言い方に変換することもできるでしょう。三つ子の魂百までと言われていますが、誘われても知らない大人についていけないとか、将来セールスが来てもだまされないとか、、もちろん、それだけではなく、神経質すぎてストレスをため、肩こりが激しかったり、リラックスするのが下手で精神を壊すかもしれません。陰陽のバランスの取れた世渡り上手な大人となるために、今、お子さんと、どんなリズム遊びの設定から楽しめるのでしょうか？それとも、リズム遊び以外でも療育の目的を叶えるプログラムは他にないのでしょうか？口八丁手八丁の支援力をぜひ磨いてください。